

KONAN UNIVERSITY

汝が車、星につなげ：エマソンと天文学

著者	青山 義孝
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
巻	164
ページ	27-35
発行年	2014-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00001110

汝が車，星につなげ

——エマソンと天文学——

青 山 義 孝

略記表

エマソンの作品からの引用に際しては以下のように略記する。

ECW: *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*.

EEL: *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*.

EJ: *Journals of Ralph Waldo Emerson*.

ELE: *Emerson: Essays and Lectures*.

ES: *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*.

ESJ: *Ralph Waldo Emerson: Selected Journals*.

EYES: *Young Emerson Speaks: Unpublished Discourses on Many Subjects*.

アメリカに“Hitch your wagon to a star”という格言がある。「大志を抱け」とか「野心を抱け」といった意味である。札幌農学校のウィリアム・スミス・クラーク博士が残した「少年よ，大志をいだけ」(“Boys be ambitious!”) とほぼ同じ意味の格言であるが，“Hitch your wagon to a star”のもとになっているのはエマソンの文章である。もっともエマソンの文章は，星に荷車をつないで地上を見下ろすと神々が人間を支援しているのが見える，といった意味なのでこの格言の意味とは直接のつながりはない。クラーク博士の“Boys be ambitious!”を知っているアメリカ人ははいないだろうが，“Hitch your wagon to a star”を知らないアメリカ人は少ないだろう。エマソンと星，天文学の関係を探してみたい。

1957年10月4日のソビエト連邦による人類初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げ成功によるスプートニク・ショックは，米ソ宇宙開発競争においてアメリカが味わった最初の屈辱であった。その汚名を晴らすため，アメリカはヴァンガード計画，マーキュリー計画，ジェミニ計画，アポロ計画を推進していったが，1961年4月12日，ユーリ・ガガーリンが搭乗したボストーク1号による人類史上初の有人宇宙飛行の成功を目の当たりにしたアメリカ国民は，再度，決定的な敗北感を味わうこととなった。先を行くソ連に追いつき追い越すために，ジョン・F・ケネディー大統領は，

1961年5月25日，特別両院合同会議の席上で10年以内に人間を月に送ると声明し，1960年初頭アイゼンハワー政権下において開始されたアポロ計画の目標を月面着陸に変更させた。1969年7月20日のニール・アームストロングとバズ・オルドリンによる月面着陸によってケネディーの夢は実現することとなる。アポロ計画は1972年に終結を迎えるまで継続され，都合6回の月面着陸を成功させた。

ところで1972年に終結を迎えたアポロ計画だが，実はすべての調査研究項目が完全に閉じられてしまったわけではなく，現在でも継続して推進されているプランがある。地球から月までの距離の計測である。計測はニューメキシコ州のアパッチポイント天文台で常時実施されている。月面に着陸した飛行士が月面に設置したコーナーキューブという反射板に天文台からレーザー光線を発射して帰ってくる光線を3.5メートルの望遠鏡を使ってキャッチし，往復にかかった時間を計測することで距離を算出するのである。計測の結果，地球と月の距離は年3.8センチメートルずつ広がっていることが分かっている。

エマソンの文章にこの地球と月との距離について触れている個所があるので引用しよう。

ある研究者が確かめたところによると，一定の年数がたつと，地球の月は，その軌道からはずれてしまい，それが現在徐々にすすんでいるのが，顕著になりだしているほどで，このような離心的運動が将来地球におそろしい結果を及ぼすのだそうである。(ES 4: 157)

これは，1832年5月27日の一般に「天文学」と呼ばれる説教からの引用であるが，この説教を読めば，エマソンが若いころ天文学に深い関心を抱いていたことがよく分かる。以下，説教「天文学」を読みながら，エマソン思想における無限の意味を探りたい。

エマソンと天文学との出会いはさらに古い。1803年生まれのエマソンは，10歳の時にボストン・ラテン学

校に入学したが、ラテン学校在学中、エマソンは校長のベンジャミン・アブソープ・グールドに毎週レポートを提出していた。14歳の時、最後に提出したレポートのテーマが天文学であった。アメリカ最古の都市公園でもあるボストンコモンで見上げた星空の美しさに魅了され、それ以降エマソンは星空、宇宙、天文学に興味を抱くようになった。このときの神秘体験が、エマソン自身が「透明な眼球」に変容する『自然』のあの有名な文章の淵源となっている (Allen 36-37)。ある意味でエマソン思想の種が胚胎していたのは天文学であったと言える。

エマソンはハーヴァード大学在学中から晩年に至るまで日記を書き続け、日記の記述に手を入れながら様々な作品に仕上げていくのが、エマソンのスタイルであり、いわば日記がエマソンの思想の源泉であった。その日記の最初の記述は大学3年の1820年1月25日のもので、エマソン16歳の冬のことであった。25日の記述は日記執筆宣言のような性質のもので、実質的に思索の記録的な文章をしたためたのは翌26日である。その26日の文章のテーマが天文学である。エマソンは「果てしない宇宙全体」についての思索が精神を拡大し満足させることができると言いながら、巨大な光の集合の背後に広がる漆黒の「無限」に思いを寄せ、シャトーブリアンの「宇宙は視覚化された神の想像力である」という文章を引用している。この日記の最初の文章からも読み取ることができるように、エマソンの思索の根源をなすテーマの一つは天文学であった。この文章に続く記述は2月6日のものになるが、その5行ほどの短い文章を訳してみよう——「神の臨在は崇高性の見事なテーマである。たとえば聖職者に説示することとする「なかならずく忘れることなかれ、神の全知なることを——万物をみそなわす神の目が今汝に注がれている、これからも常に注がれておるのだ——しこうして神の臨在において汝に課することとする、神を畏れ神に従いたまえ。」神の玉座は星座の遥か上に設けられている」(ESJ 1: 2-4)。ここで言及されている「無限」が、エマソンが生涯にわたって追及することとなるテーマ「個人の無限性」の胞胚である。さらに興味深いのは、「万物をみそなわす神の目」(“His allseeing eye”)が、代表作『自然』の「わたしは透明な眼球になり、無でありながら一切を見、普遍的存在者の流れが身体中を駆けめぐる。わたしは神の一部なのだ」(ELE 10)へと発展している点である。

エマソンは、ラテン学校卒業とともにハーヴァード大学へ入学した。1821年に大学を卒業してからの5年

間、兄の経営する私塾の教師を務め、その後1825年から1828年まで、ハーヴァード大学神学部で神学を学んだ後、1829年からボストン第二教会の牧師補の職に就いた。ところが、エマソンの神学思想は教会関係者が懸念を覚えるほどリベラルなものとなっており、牧師補の職に就いて数年もたたないうちに次第に聖職に矛盾を感じるようになってしまう。しかも牧師補の職に就いた年に結婚した妻エレンが、1831年に病死するという悲劇に見舞われ、失意のどん底に落ちたエマソンは、牧師職辞任の思いを強くするようになり、妻の死の翌年、1832年の5月には辞任の決意を固め、6月に入って教会へかねてから疑問に思っていた主の晩餐についての持論を書き送る。夏の間、教会の建物の修理がなされたりすることもあるが「主の晩餐」についての説教は9月になるが、10月末に正式に辞任の願いが受理され、以後エマソンは教会との関係を断つこととなる。

辞任に至る流れの中でみると、冒頭でふれた1832年5月27日の説教「天文学」が重要な位置を占めていることが明らかとなる。日記に語らせてみよう。説教の10日前にエマソンは「まことに小説は事実よりも奇なり」と書き始めて天文学を語り、「神がこの〔天文学の〕知識をわれわれに与えたのはわれわれの神学を修正し精神を教育するためなり」(SJ 1: 193)と締めくくっている。そして前日の日記には「天文学」と題した次のような文章を残している。

天文学はすぐれた数々の効用をもっている。それが投げかける問いは、何と含蓄に富んでいることだろう。無限の空間があるということを君は信じるだろうか。この巨大な思想について、ちょっと考えてみよう。この空間の世界では、現実に存在するもの、実在の一族は、一つの点にすぎず、人間や天使の思想も空間の縁辺を超えたものはまったく測り知ることができないのだが、観念論のほうがこうした空間よりももっと真実めかしく見えるくらいではないか。いっさいのものがその巨大な闇のふところに消えてしまうのだ。(EJ 2: 489)

さらに説教からおおよそ1週間おいて、6月2日には

今までにも、時おり私は、立派な牧師になるためには牧師の職を去ることが必要なのだと考えたことがあった。この職業は、もう時代おくれなのだ。すっかり変ってしまった時代のなかで、私たちは

祖先たちの死んだ形骸にしたがって神を礼拝している。ソクラテスの説いた異教のほうが，老朽淘汰されたキリスト教よりもましなのではなかろうか。
(ESJ 1: 193)

と辞意を書きとめている。

さて説教でエマソンは，まず科学の進歩と宗教の関係を，聖書の読み方から説き始める。「神と人間との関係を記した聖書は，自然の創造者から出ていると主張しているのだから，聖書は自然の光によって読まれるべきであると考えてよいし，神の創造物についての知識を多くもてば，それだけ神の言葉をよく理解でき，科学の進歩によって，宗教はいよいよ純粋な真実なものになると考えてよい」(ES 4: 154)。このように科学の進歩によって宗教はより純粋で真実な次元に向上するのであるから，当然，人間は自然に関する書物に深い関心を払うようになり，真理を愛する者は，年々，科学が明らかにする事実を，「創造主が自らわれわれに与えている啓示の註解，解説，もしくは継続」として，好奇の眼をもって見ることになる，としたうえで，エマソンは「天文学の現状から暗示されるいくつかの考察と，宇宙の広さと構造に関する人間のすばらしい発見が，宗教思想に及ぼした影響についての考察」(ES 4: 377)を始める。

エマソンによれば，天文学と宗教史とを結びつける考え方が多いが，その際，天文学は「崇高な感情の眼に見えるイメージ」(ES 4: 154)として利用される。必ずしも多くの人が天を仰いで，美の印象をそれほど敏感に覚えないとしても，天は，人々にとって，あらゆる論議の手っ取り早い例証になり，いろいろな問題を暗示してくれると述べた後で，若い世代の会衆に向かってこう尋ねる——「あなたがたは，宇宙が実際に無限であるという問題を，心のなかで解決し，それを信じておられるのであろうか。そうではないといえば，おかしいことになるし，言葉の上では，ためらうことなくそうだと認めておられるであろうが，それでも私は執拗に，それを信じておられるか，と尋ねる。」

宇宙の無限の広がりというこの大いなる問題を，しばらくじっくり考えていただきたい。そうすれば，この問題がどんなに難問であるかを感じるであろうし，天文学が人間に示す最初の考えは，宇宙，神の創造した全世界もそのなかでは，一介の点にすぎないような宇宙であり，人間や天使が大胆な想像をしたところで，この広大無辺の宇宙の

縁にやっと入ることができるぐらいであることがわかって。存在するものすべてが，宇宙の闇夜の奥深くに，姿を没してしまうのである。天文学の初歩的な見解も，このようにわれわれに感銘と刺激とを与えるものである。
(ES 4: 155)

エマソンは天文学の研究が宗教にもたらした重要な成果をふたつ挙げ，そのひとつは，「われわれのもつ神の観念を修正し，これを崇高なものにするとともに，われわれの人間観を謙虚なものにしたことである」と言う。

古代の人びとは，その思索において，もちろん，人間を最高の生物の典型と考えていたし，神の被造物のうちで知力があり善いものは，何でも，人間に似ているにちがいないと想像していた。神自身すら，すべての民族の原始宗教においては，人間の姿をとっているし，偶像崇拜はその神に人間の身体と同じく，人間の情熱をも与えている。天文学は，こういった思いあがった人間の夢想をすべて訂正し，また土星，木星，ハーシェル星，水星などにどのような生物が住んでいようと，この人間と同じに太陽の回りを旅する太陽系の一族においても，その生物は，人間とは全くちがった組織体をもっているにちがいないことを証明している。
(ES 4: 155)

二つ目の成果としてエマソンは，天文学は，神学の教義を修正，拡大した点で，否定できない効果があったと指摘する。地動説が天動説に取って代わった影響が，漠然とではあるが，たとえば，次のような讃美歌にも表れている，と言う。

神のやさしさは
狭い地球にかぎられず，
あたりを無数の世界が囲むゆえ
神を人間のみの神とは思わず。
(ES 4: 156)

太陽系について正確な説明がされるようになった時，文明世界に住む人々は自分たちが住んでいる地球が，比較的小さな不透明な惑星にすぎず，太陽という一つの星，無数の燃える太陽の中のとるにたりない星の回りを回っていることがわかった。この新知識の結果，科学においてみられたのと同じような革命が宗教にも生じたのだが，それは，「地球を，もはや神が心を用

いるべき唯一の対象とみることができなくなった」(ES 4: 157) 結果である、とエマソンは指摘する。

エマソンによれば、キリスト教徒は長い間にわたって、神は永遠の昔から、人間の墮落を予見し、人間が救われる方法を考え出していた、という信仰をもち続け、キリストが人間の救済にとりかかったと信じてきた。そしてこうした人間の思いあがった想像のなかでは、人間の贖罪の計画、といわれたものが、まるで宇宙には人間以外に存在するものはないかのように、神と天使たちの注意をひいたという。「地球は」昔の神学者の奇妙な言葉によると、「神の復讐の処刑台であった。」ところで、この神学説はあらゆる点で、昔の天体説に合致していた。望遠鏡がこの神学説と天体説両者に致命的な打撃とならざるをえなかった。神学でいう「贖罪の計画」を全く信じがたいものにしたのは、まぎれもなくコペルニクス天文学の結果であった。天体の機構を研究した大天才たちは、世におこなわれていた教義を信じなくなり、例えばニュートンはユニテリアンになった。

生ける神の知恵と力の荘厳ながめが目の前に提示されたのにもかかわらず——神を信じない天文学者は気持ちが悪いということをいわせた人間が生まれている信仰心にもかかわらず——天体に示された神の力と、同胞が宗教だキリスト教だといっている粗野な信条とが、ちがすぎるので、反感をもったフランスのすぐれた天文学者たちは、人間の希望と慰めである宗教をしりぞけ、彼らが明らかにした神の機構を無視して、原因を拒否し、永遠の「必然」を信じた。そして、この外的な必然が、けっして、神——理知的な原因——ではないかのように思ったのである。(ES 4: 157)

自然を研究する者が、単純で完全な自然の諸法則をすてて、教会や大学に入り、神の性格を学ぼうとした時、「自然」の原因に関して自分たちがくだした結論とは一致せず、これと矛盾する粗野で無価値な神概念を、見せつけられたので、彼らは異口同音に教会の信条をしりぞけた。ほかの者たちは、自分たちに合った信仰をみつけることができないので、あらゆるものをしりぞけ、神を無視して、人間の希望と慰めをしりぞけた。

(EYES 175)

こうした、いわば、天文学のネガティブな影響を説

いたうえで、エマソンはこれとは反対の傾向を指摘する。

天文学者たちが、このように天体からベールをとり、のぞき、人間の目を小さな地球から、周囲の無限へと向けるようにしたため、きわめて自然の結果として、教会や博士たちがうちたてた宇宙観がゆすぶられ、またすべてのものを多少とも疑ってかかる風潮が生じたのであるが、一方、このわざわいのつぐないとなる、これとは反対の傾向も生じた。「過去二百年間の研究の結果、宇宙の計画のすばらしい証明があきらかにされた。これは慈悲に富んだ計画であって、原子や天体のうちに、遠方にも近くにも作用し、時間と空間の両方において、驚異的な範囲に及び、完全にその目的を果たしているため、これを研究考察する者は、研究すればするほど驚きと善びとを禁じえないのだ」(ES 4: 157)。

こういうわけで、天文学は、人類のために、自然の偉大性と精神の偉大性とを調和してくれたのだ。かつて、神はこの世界の支配者である、と解されていた。今では、人間は、神が「無限の精神」、^{ビーイング}荘厳な賞讃すべき「神」であり、しかも、無比の英知をもっていると同じに、慈愛にみちいていると感じている。

さらに、われわれの宗教観が、このように、拡大され、誤りがこのように訂正され、そして、われわれが、神の支配について以前よりも十分に考察するようになったのは、天文学の進歩が、必然的にもたらしたことであって、この進歩が神の計画によるものであったことは、疑いえないところである。徐々におこなわれた進歩ではあったが、これは、人間に与えられた神の能力が着々となしとげてきた結果であった。目と光をつくり、地球を透明な大気で包んだ神は、このようにしてその被造物である人間に、星を観察して星の法則を書き記すように教えたのだ。このようにして、神は人間のために、天を開き、宗教を改革し、精神を教育するようにした。自然の温和な、愛情に富んだ、しかも鋭い声により、神はつねに人間を、より高い真理へと導き、人間がその能力をあげて研究すれば、神自身についてのいよいよ正しい知識をもって報いるのである。(ES 4: 158)

最後に、エマソンは天文学が新約聖書の教義についてもたらす効果について、「その効果は、教義の矛盾

を指摘することではなく、訂正をもたらすことである。教義の否定ではなく、純化である。われわれすべてがその子孫であり、われわれすべてがその愛をうけている神についての厳かな教義を証明している。他方、教義のうちで、一時的で、どうでもよく、普遍的でない、条項は、すべてこれを闇に葬る結果となった。ここには、十分の一税も、聖職者も、エルサレムも、ゲリジム山もない。ここには神秘的な犠牲も、贖いの血もない」(ES 4: 158)と結論付けている。

エレーヌ・L. テュゼによれば、一つの時代をそっくり特徴づける想像力の傾向としての宇宙論的想像力がロマン主義的であった時代に、「大いなる渦」は無限への逃走に人気の座を明け渡し、ロマン主義的想像力はこれに飛びついた。

全宇宙を完全に取り込む知的な快樂に代えて、あらゆる予想を超えて自分がどこか外側へ投げ出されていると感じる快樂を、自我を放棄し見失ってしまう悦楽を、「たぶん」で味つけされた神秘的で、ある種知的な眩暈を心ゆくまで味わう喜悅を、ロマン派はとった。それにしても一体どこへ運ばれていくのか。星の煌めく光の領域でそれとも恐るべき衝突に向かって直進していくのか。ロマン主義的想像力は「帰りのない外への旅立ち」への情念に身を委ねた。(『無限と超越』104-105)

エマソンの天文学とは宇宙の無限性を認識するところから始まる。人間の目を小さな地球から、周囲の無限へと向けさせ、宇宙の無限性を認識させることによって、「神は人間のために、天を開き、宗教を改革し、精神を教育」し、「より高い真理」へと導くのだ、とエマソンは言うが、そのより高い真理とは「われわれすべてがその子孫であり、われわれすべてがその愛をうけている神についての厳かな教義」である。すなわち宇宙の無限性の認識が人間が神の子孫であること、神の似姿としての自己の認識をもたらすというのである。これがエマソンの思想の中核をなす「自己信頼」の観念へと発展していくことになる。ところでエマソンが天文学の研究が宗教にもたらした重要な成果のひとつ目にあげていたのは、「われわれのもつ神の観念を修正し、これを崇高なものにするとともに、われわれの人間観を謙虚なものにしたこと」であったが、ここでいう謙虚な人間観と自己信頼との関係はどう考えればよいのであろうか。

エマソンの自己信頼は、人間の無限性、すなわち神

性を信頼することである。人間の神格化のプロセスをエマソンは日記でこう説明している。

森のなかを歩いているとき、私がしじゅう感ずることを今日も感じたりどんなことがこの人生において私にふりかかって来ても、どんな災厄、どんな汚辱がこの身に及んでも(目さえ私に残っていれば)、自然はかならず甘美な慰めをあたえてくれるということである。頭を軽やかな風に吹かれながら裸かの大地の上に立ち、無限の空間へひきあげられてゆくとき、私は、自分と宇宙とのつながりのなかに深いしあわせを覚える。こんなときは、親しい友達の名前も、よそよそしい、かりそめのもののように響く。私は拘束なき美と力を受け継ぐ者なのだ。こんなとき、私がひとりの仲間と一緒に歩いているとすれば、彼は彼の「絶対理性」から私の「絶対理性」へ語りかける——つまり、どちらも神から語りかけるのだ。ふたりが兄弟同士だとか、知人同士だとか、主人と召使だとかいう関係は、こんなときには、記憶するにも値しない些事になるのだ。(ESJ 1: 400)

この文章はエマソンがラテン学校に通っていたころのボストンコモンでの神秘体験、およびチャールストンでの体験がもとになっていると言われているが、ここで言う「拘束なき美と力を受け継ぐ者」とは神格化された自己に他ならず、「こんなとき、私がひとりの仲間と一緒に歩いているとすれば、彼は彼の「絶対理性」から私の「絶対理性」へ語りかける——つまり、どちらも神から語りかける」のだとエマソンは言う。この日記の文章は『自然』の有名な次の文章へと発展し、人間の神格化のプロセスがさらに明確な形で描写される。

森の中でも人間は蛇が皮を脱ぐように自分の齢を脱ぎ捨て、人生のどの段階に差ししかかっていようとも常に子どもに立ち返る。森には永遠の青春が宿る。この神の植林地の中では上品な礼儀と神々しさが支配し、春夏秋冬時を分かたずことなく祭りが繰り広げられており、招かれて仮に千年居続けたとしても飽きがこようななど思いもよらない。森の中でわれわれは理性と信仰を取り戻す。そこにいれば、わたしは自分の人生に、自然がつぐなえないようなことは何ひとつ——どんな恥辱も、どんな災いも起こることはない(わたしに目だけは

残してくれる)と感じる。吹きさらしの大地に立ち——頭を爽快な大気に浸して無限の空間の中にもたげていると——いやしい私心など一つ残らず消え失せてしまう。わたしは透明な眼球になり、無でありながら一切を見、普遍的存在者の流れが身体中を駆けめぐる。わたしは神の一部なのだ。

(ELE 10)

「無限の空間」の中で「わたしは透明な眼球になり、無でありながら一切を見、普遍的存在者の流れが身体中を駆けめぐる。わたしは神の一部なのだ。」これがエマソンの言う人間の神格化である。神格化されるためには人間はまず「透明」になり「無」にならなければならない。

「個別的なもの」と「普遍的なもの」と二種の事実があるが、有限なもの、一時的なもの、無知、罪惡、死などは前者に属し、無限なもの、不変なもの、真理、善、生命などは後者に属する。人間のなかにはこの両者が存在する。「全体」が人間のなか存在する。人間においては、「個別的なもの」から「普遍的なもの」へ、人間的なものから神的なものへと、たえず前進が行なわれている。「自我は死んでゆく。しかも絶え間なく死んでゆく。」

(ESJ 1: 485)

「人間的なものから神的なもの」への前進とはすなわち自我の死である。エマソンが謙虚な人間観という際の人間とは、「個別的なもの」が死んで「透明」になり「無」と化した段階の人間にはかならない。「個別的なもの」が死んで「透明」になり「無」と化した後に「普遍的なもの」「無限なもの」「神的なもの」へと前進し、「神の一部」となった自己への信頼、これがエマソンの「自己信頼」である。神学部在学中、チャールストンで満天の星空を仰ぎみたときの神秘的な体験をエマソンは1827年4月17日の日記にこう記している。

この世における偉大と魂の偉大と、二つに一つを選ばなければならないことがよくあるが、両者の利益は相容れないのである。夜は美しく、星々はそのおごりかな力をほくの上に降りそそぐ。そしてほくは孤独のなかで、卑俗な社会の歡樂からは到底得られないよろこびを覚える。この一瞬のほくの心のある特定の状態が、宇宙において、まったく新しいものであるかもしれないこと、この一

時の感情が、永遠にわたる道徳的な生命の世界で、特殊な、比類のないものであるかもしれないことを思うと、しみじみとしたよろこびを覚える。ほくは新しい生活を送るのだ。霊の世界において、前人未到の地歩を占めるのだ。ほくは、ほくの前で、はるかな、目くるめく無限へとひろがっている、思想と行動の生涯を始めるのだ。ほくの行く手に、不可思議な思想が突然姿をあらわして、ほくを前方へさしまねく。ほくは、自分が神に通ずる大道を歩いていることを疑わない。としたら、なぜほくは、ほくの天性に尊厳なものを加えているこれらの思想やこのような生命に、満ちたりた思いをいだかないのだろうか。ほくの純粋な野心の対象が、尊敬もされず認められてもいない浮薄な人びとの集まりのなかで、異彩を放とうという野望を、なぜ棄て去ることができないのだろうか。

(ESJ 1: 145-46)

エマソンは1840年4月7日の日記に「わたしはあらゆる講演で、ただ一つの教えを説いてきた。それは個人の無限性である」(ESJ 1: 735)と記しているが、「個人の無限性」すなわち人間の神性がエマソンのすべての作品に共通するテーマである。エマソンは、無限を認識することによって神に通ずる大道を歩んでいる確信を得、魂の無限性を悟る。魂の無限性、人間の神性を説くことこそがエマソンにとっての真の宗教であった。「祈りは〔……〕魂が、未知の無限のなかへと突進すること」である(ELE 47)にもかかわらず、「諸君のうちにある無限の「法則」に従い、天地がすべての美しいもののうちに反映している無限の「美」とともに、敢然と生きることも、してはならない、と形式化した宗教は要求する。諸君のすべきことは、諸君の本性をキリストの本性に従わすことである。諸君は教会の解釈をいれ、俗物の画くイエスの像を取り上げなくてはならない」(ELE 81)とエマソンは嘆く。

魂について説教する者はいない。教会はよろめき倒れようとしている。〔……〕どれだけの教会のなかで、どれだけの預言者によって、人びとは自分が無限の「魂」であって天地が自分の心のなかに入ってきて、自分が永久に神の魂を飲むものであることを、教えられているであろうか。

(ELE 83-84)

エマソンにとっての宗教は、「無限の空間」の中で

「わたしは透明な眼球になり，無でありながら一切を見，普遍的存在者の流れが身体中を駆けめぐる。わたしは神の一部なのだ」との認識を得ることである。そのエマソンの思想を集約しているのが，1831年7月6日に書きとめられた次の「汝自身を知れ」と題する詩である。エマソンの思想を知る上で重要な作品であるので，長くなるが全文を引用する。

単純な真理という
強烈な食物に耐えうるなら，
そののびやかで若々しき魂の中にて考えおるもの
と
わたしの言葉を比べる勇気があるなら，
この事実を肝に銘じ忘れぬことだ！——
汝の中に神は在す。
比喩でもなければたとえ話でもない，
衆人が知らず汝も知らぬ，
それでも神は在す。

神は汝が世界に在す，
しかし汝が世界は神を知らぬ。
神は金剛の心
その心より命の水脈分かればきたる。
厚き雲に覆われてかしこに座すは
人の心に抱かれし
無限，
汝，汝が客人に会ったこととてなく，
汝に具わりしものの何たるかを知らず。
内に秘めたる命を覆う雲は
汝が罪より織りあげたる厚き帳，
光輪その厚き帳を打ち破らんとするも
汝が罪の色に染まり，光を失う。
それ故，人間よ！
汝が客人，汝が魂の
規模に合わせ振舞うがいい。
行く先々で堂々と振舞う
この使節にふさわしく
偉大であれ。

汝が魂に委ねよ——
成すがままに任せるのだ——
魂こそ，そう，神ご自身なのだ，
万物を統るまさしくかの一者なのだ，
汝のうちより語るその声音はくぐもり，
見詰める眼差しもその光を失いしとはいえ。

しかれどもその音声に耳傾け，
その王者然たる思想に従えば，
汝が耳にもしかと響き，
汝が目にも鮮やかに映ろう。
覆いし雲もちぎれ
主を目の当たりにしよう。
故に偉大であれ，
高慢であってはならぬ——高慢なることを蔑むほ
ど偉大であれ。
目移りなどせぬこと，
隅々を覗いてもならぬ。
天真爛漫なる神にふさわしく，
前を見るのだ。
汝が部屋にても威厳を失うことなく，
光に満ちあふれ，歩むのだ。
そして，王者が
国を裏切ろうとはせぬように，
汝も汝が国を裏切ってはならぬ。

今初めて啓かれたものを
汝が正覚できるのは，
万物に在す霊が，
汝にも在したもうからだ，
そして汝が自然の法則を知ることができるのも
その造り主が汝の胸に在したもうからだ。

しかれば，幸いなるかな若者よ，幸いなるかなこ
の真理を知り愛でるもの，
汝が汝の法なり，
万物の霊汝に在したもう故
汝こそすべてなり。
律法，福音，摂理，
天国，地獄，最後の審判，
真理と善の計り知れぬ倉，
このことごとくを
汝がただ一つの心の内に見いださねばならぬ，
汝が心を措いて他に見いだすことなどではせぬ。

汝こそ律法なり，
汝が心の奥の部屋よりの応答がなければ，
福音も，
平和や希望を啓示などしてはくれぬ，——
他はすべてただのわらくず。
知らざりし真理を啓示などしてはくれぬ。
摂理とは

まさしく汝のことなり
 摂理なる汝が自らにさずける
 汝が勤労には富を、汝が怠惰には窮乏を、
 善には栄光を、怠惰には蛾を。
 汝が風を蒔けば、やがてつむじ風を刈りとる、
 いつの世にも汝は、自らの勤労の
 賃金を支払うのだ。
 徳を育み、罪を呪う。
 徳おのが明かりもて見、
 罪おのが作りし夜陰につまづく。

正しき汝を嘉みするものは誰
 汝に在す神なり。
 邪なる汝を懲らすものは誰
 汝に在す神なり。
 汝が邪なる行いを罰するものは誰
 汝に在す神なり。
 汝が悪に要るものは何
 汝が悪しき心なり、罪科故に盲
 いや増しに悪に傾く
 これすなわち内なる神の在ます大いなる隠れ家な
 り。

.....
 次いで、その影
 おぼろに、はるか遠く、
 我らが運勢に顕れいずる。在るはすべて神。

.....
 神のほかには何ものも存在しない。
 いずこを見渡せど
 ものみな急ぎ神の下へ帰りゆく
 光といえども神の薄き影に過ぎぬなり。
 神に富と力を求めるか、御自らの
 姿をわが魂に与えたもうた神に。
 逆巻く海原が波を求め
 星のまたたく大空が消えなるとする炭を所望する
 が如き振舞いだ、——
 我が身内にあるもの森羅万象に在ますが故なり。
 (EJ 2: 395-99)

エマソンは19世紀前半から半ばにかけてのアメリカで、オピニオンリーダーとして大きな影響力を発揮していたが、独創的な思想家というわけではなく、先人の思想をエマソン流に焼きなおしていった。一例として、エマソンの師でもありアメリカのユニテリアニズムを代表するウィリアム・エラリー・チャニングを見

てみよう。チャニングはロマン主義の鼓動を敏感に、しかも深みのある流儀で予知し反映した。外面的にはスコットランド哲学と、啓蒙主義の自然神学というモチーフに忠実であったが、彼にとっての自然はすでに、法則の支配する神の御手の業以上のものを示唆しはじめており、神の内在性をも宣言していたのである。また人間と神との本質的同一性、人間の完全性を唱える人間性完全主義というチャニングの教義は多大の影響力を発揮し、エマソンはチャニングを指して「われらが主教」と呼んだ(オールストローム 44-45)。そのチャニングは「魂はまさしく神の無限性の姿である」(Channing 2), 「神の似姿がわれわれの魂に宿っている」(Channing 6), 「有限は無限の顕現である」(Channing 53), 「神の無限性はその姿を人間の魂の中に宿している。そして魂を通して〔……〕われわれはこの神の概念に思い至るのである」(Channing 295)などという主張を繰り返している。

チャニングが予知し反映したロマン主義の鼓動を、エマソンは余すところなく吸収してアメリカに導入した。『ダイアル』誌に発表した「現代文学論」で、エマソンは「無限性の感情」こそが現代文学・芸術の本質であるとした。コンヴァース・フランシスの1837年5月29日の日記の記述によれば、同日ジョージ・リブリー邸でトランセンデンタル・クラブの3回目の会合が持たれ、宗教の本質をめぐって議論が白熱した。その中でエマソンは、宗教とは「無限を感知することによって得られる、震えおののくような喜びと畏怖の感情」であると定義した(*On Emerson* 203)。ロマン主義の興隆とともにチャニングのユニテリアニズムは急速に衰退していったが、「チャニングの〔……〕影響が衰退したからといって不安がることはない。〔……〕神はその聖堂を人間の心の中に、教会と宗教の廃墟の上に築いているのだ」(ELE 1056)とエマソンは言う。「人間の無限性の教義」(ELE 180)を説くこと、それが、おそらくはルネ・デカルトの『省察』にあやかった可能性もあるが、直接的にはジョージ・フォックスに絡んでエマソンが「第一哲学」(ESJ 1: 415)と呼んだ、「宗教的真理への洞察」(EJ 1: 210)である。

引証文献

- オールストローム, S. E. 『アメリカ神学思想史入門』.
 児玉佳典子訳. 教文館, 1990年.
 Cady, Edwin H. and Louis J. Budd, eds. *On Emerson: The Best from American Literature*. Durham: Duke UP, 1988.
 Channing, William E. *Works of William E. Channing*. New York: Burt Franklin, 1970.

- Emerson, Ralph Waldo. The Complete Works of Ralph Waldo Emerson. Boston: Houghton and Mifflin, 1903.
- _____. *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*. Stephen E. Whicher, Robert E. Spiller and Wallace E. Williams. Cambridge: The Belknap Press of Harvard UP, 1959-72.
- _____. *Journals of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Edward Waldo Emerson and Waldo Emerson Forbes. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1909-14.
- _____. *Emerson: Essays and Lectures*. Ed. Joel Porte. New York: Literary Classics of the United States, 1983.
- _____. *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Albert J. von Frank *et al.* Columbia: U of Missouri P, 1989-92.
- _____. *Ralph Waldo Emerson: Selected Journals*. Ed. Lawrence Rosenwald. New York: Literary Classics of the United States, 2010.
- _____. *Young Emerson Speaks: Unpublished Discourses on Many Subjects*. Ed. Arthur Cushman McGiffert, Jr. Boston: Houghton Mifflin, 1938.
- Tuzet, Hélène L. "Cosmic Images." *Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*. Eds. Philip P. Wiener *et al.* Vol. 1. New York: Charles Scribner's Sons, 1968. 513-23.